

アンサンブル・チコーニア 第2回公演
~~ 西洋音楽との再会・江戸と明治の音楽事情 ~~

二之巻

致道館と七絃の琴

(江戸中期～江戸後期)

2-1 東臯心越禪師と東臯琴譜正本



琴（きん）は3000年以上の歴史がある中国の伝統楽器で、7本の弦を持つことから日本では「七弦琴」（しちげんのきん）とも呼ばれています。琴は中国の文人が嗜むべきとされた「琴・棋・書・画」のひとつでした。孔子、諸葛孔明、白居易など歴史上著名な多くの文人によって演奏されてきました。日本へは奈良時代に中国から伝わり、平安時代になると、琴は貴族たちの嗜みになり「源氏物語」などにも登場します。天皇も自ら琴を弾いたことが物語には書かれています。しかし、貴族文化が衰退すると琴の文化も途絶えてしまいます。

延宝4年（1676年）中国の曹洞宗の僧、東臯心越禪師（とうこうしんえつぜんじ）は、清の圧政から逃れるため日本に亡命します。最初は長崎の興福寺に住みましたが、後に水戸の天徳寺に移住しました。東臯心越は、詩文・書画・篆刻などの中国の文化、中でも文人の楽器である古琴を再び日本に伝えたことで「琴樂の中興の祖」と言われています。琴は、儒学者・文人・茶人の中で盛んに嗜まれ、日本の文化に浸透していきます。東臯心越が伝えた琴曲の譜「東臯琴譜」（とうこうきんぷ）は、門下の琴士に受け継がれ、琴の隆盛は明治の始めまで続くのです。

[演奏曲] 大哉引

儒教の経典・四書のひとつ「中庸」第二十七章に東臯心越禪師が付けた曲です。「大いなる哉、聖人の道」と始まる、聖人の道を賛美する曲。

2-2 荻生徂徠と藩校致道館



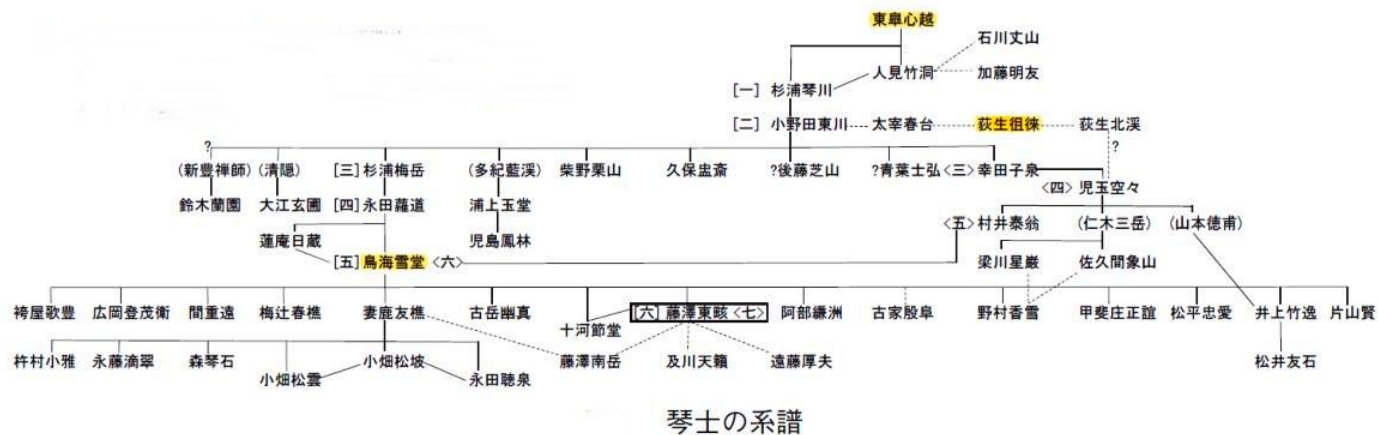
江戸中期の儒学者、荻生徂徠は朱子学を批判、儀式と音楽「礼楽」（れいがく）の重要性を指摘する徂徠学と呼ばれる学問体系を作り上げます。儒教の原典に立ち返る徂徠の学問は、儒学だけでなく当時の学芸の様々な領域に影響を与えます。徂徠は、中国伝来の琴の名手としても知られていました。日本に伝来した最古の琴の楽譜「碓石調幽蘭第五」（けっせきちょうゆうらんだいご）を研究、琴のの構造、調弦法、記譜法などに関する研究書「琴学大意抄」（きんがくたいいしょう）を執筆します。

藩校致道館は、文化2年（1805年）庄内藩7代目藩主・酒井忠徳（ただあり）によって創設された学問所に始まります。致道館は徂徠学を教学とし、自主性を重んじた教育方針で各自の天性に応じ長所を伸ばすことに主眼がおかれます。これが質実剛健な教育文化の風土を育む土壌となりました。文化2年（1805年）藩校致道館司書となった氏家天爵（龍溪）は、芸万般に通じた希にみる才人として知られ絵や書にも優れていました。また琴の名手としても有名でした。天爵の描いた南画「山水図」は日本の文化遺産として致道博物館に所蔵されています。また、天爵が愛用していた琴は庄内神社に寄贈され神社のの宝物として収蔵されています。

[演奏曲] 平沙落雁

晩冬に雁の群れが砂原に舞い降りる情景を描写した琴曲。

2-3 鳥海雪堂と庄内藩士が嗜んだ七絃の琴



江戸後期、琴の名手として知られた鳥海雪堂は遊佐の願専寺の住職でしたが、文政元年（1818年）に寺を出て大阪に寄寓、文政7年（1824年）には長崎に遊学して光永寺の日蔵上人から琴を学びました。習得した琴の奏法は、東臯心越禅師から門人を通して伝えられたものでした。その後、上人の勧めで伊勢に行き秘曲「漁樵問答」を習得します。鳥海雪堂には、大阪や江戸に多くの門人がいました。

天保15年（1844年）大阪網島の淀川の岸边に臨む雪堂の寓居で、東臯心越禅師の百五十年忌が行われたことが、門弟の著書「琴会記」に書かれています。それによれば「部屋には二つの琴を置く机（琴案）が向かい合うように設置してあり、初めに雪堂が「漁樵問答」の曲を弾いた。この曲は、東臯心越禅師が最も愛惜した曲である。続いて諸子四十人ほどが、代わる代わるに演奏を捧げた。連弾、独奏など澄んだ琴音が一日中途切れることがなかった。」と。

藩校致道館で学んだ庄内藩士には琴を嗜む者も多く、藩士の屋敷からは琴の音が流れていたといえます。藩士の中には、江戸に出仕した折に鳥海雪堂から琴の手ほどきを受けた者も居たのではないのでしょうか。

[演奏曲] 漁樵問答

自らを漁夫と樵夫に託して山水に遊ぶ自由で清らかな楽しみの境地が感じられる琴曲。明の楊掄輯『太古遺音』（別称『真伝正宗琴譜』）収載。